あとがき

この夏は、皆さんもそれぞれ楽しいヴァカンスをそれぞれのスタイルですごされたことと思います。非日常の中に、新たな発見があるものです。そのような話題をひとつお話しようかとおもいます。

今回たまたま南仏へいく途中どうしても、パリで一泊しなくてはならないことになってしまいました。シャルルドゴールでの乗り継ぎに際して、ぎりぎりに予約をいれたもので当日の乗り継ぎが予約いっぱいでできなくなってしまったためです。それで、次の日の１１時ころの飛行機をとったのですが、ついたのがもう午後の５時を過ぎていますし、空港からパリの街中にいっても２時間くらいはかかるしということで、空港のホテルを予約しました。ターミナル２Ｆのとなりの TGV の駅の上に位置する世界的なホテルチェーンのホテルです。当初、空港内にあるということから、これは失敗したかなと思っていたのですが、だって、この空港はヨーロッパのハブ空港として、世界でも超過密な発着で有名な空港だからです。絶え間なく発着する飛行機と、滑走路からターミナル１と２A-２F 間を移動する飛行機とできっとううるさくてしょうがないのではないかと心配したわけです。でも、時差があって眠るだけだからと言い聞かせての予約でした。でもホテルはインターナショナルリゾートホテルと称していたのですが、そんなことははじめは気にしていません。日本から１２時間の飛行の後、もう日本なら午前２時だぞと自分に言い聞かせながら、荷物を引き取り、税関をでて、ものの５分もかからずチェックインができてしまいました。まったく楽チンです。ホテルメンバーになっていたので、最上階のエクゼクチブルームへ予約の料金のままいれてもらえました。これもラッキーです。内部は、まるで船の中を思わせる構造のきれいな整然とした並びの、ガラスを多用した、最先端のホテルです。全体構造が一目でわかるような中央が吹き抜けでしかもその形が船型にあいた空き空間の多い開放感のある構造となっています。中へ入ってまた驚きました。音がまったくしないのです。本当に技術の勝利というか、ほんの小さなジェット機のエンジン音や、離着陸の音もまったく聞こえません。森閑とした静けさだけが、部屋の中を支配しています。小さな音のクラシック音楽をかけて、窓から一望できる２C-２D のターミナルに出入りする飛行機を見ていると、すばらしいの一言に尽きます。飛行場で音がうるさいのは覚悟の上だったのですが、まったくの杞憂でした。そんなこと不可能なんて思っていたのが、まったく可能なのです。こまかい話は割愛しますが、今の技術のすばらしさを実感した次第です。翻って、我々の関係する原子力の世界を考えてみますと、原子力の技術も同じことだと思います。高速炉も足踏み状態が続いていますが、技術（人の知恵）は必ず問題を克服できるのではないかとの思いを強く持ちました。問題があれば直せばよい。そして完成に近づけていく。不可能が可能になる。それが技術ではないのか。こんな思いを強くもった今回の私の休暇でした。

長谷川　明
hasegawa@ndc.tokai.jaeri.go.jp

核データニュース編集委員会
中川庸雄（委員長、原研）、井頭政之（東工大）、岩本　修（原研）、喜多尾憲助（データ工）、吉田　正（武蔵工大）